

特集

ASEANにかけ橋を

— 日外協の草の根国際交流

第37回 日本語スピーチ発表会を10月19日(木)、日本アセアンセンターで開催。ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイの9カ国9人の代表が日本語スピーチを披露した。

(主催=日外協、共催=日本アセアンセンター、後援=国際交流基金、協力=早稲田大学・国際学生友好会)



左からタン・ウェイケットさん(シンガポール)、サイ・トーさん(ラオス)、ミャット・ノー・キッサン(ミャンマー)、ヌルラフィファ・ビンティ・ハジ・ハッサンさん(ブルネイ)、ノム・ダナーさん(カンボジア)、チャハヤ・ファティハー・デディ・ブトリさん(インドネシア)、ボンパットチャラナン・アクソーンキットさん(タイ)、ティー・ディック・アンさん(マレーシア)、デニス・クリスチャン・コーパス・ロハスさん(フィリピン)

海外からも声援

日外協はASEAN各国で行われる日本語スピーチ・コンテスト優秀者を日本に招く「草の根国際交流」を1986年から実施。1週間、企業訪問や文化交流などを通じて日本を実際に体験してもらう。交流の目的は、ASEANの若い世代の人たちに日本への理解をより深めてもらい将来、日本とのかけ橋になってもらうことだ。

日本語スピーチ発表会はこの事業の中でも最重要イベントに位置付けられる。発表会には、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイの各国大使館のほか、関係団体、発表者の友人など、約50人が出席。また、発表会の模様はオンライン中継され、発表者の家族をはじめ友人、日本語スピーチ・コンテストの各国開催団体などの40人以上が海外から声援を送った。

夢をかなえるために

開会挨拶に立った日外協・上野幹夫会長(中外製薬(株)特別顧問)は、出席者に謝意を表明するとともに、37回目となる今回までの発表者の累計が369人に上ることに言及。その多くが帰国後も留学や就業を通して日本と関わり続けているなど、関係者を含め交流の輪が大きく広がっていると述べた。そして、発表者たちに「ネットワークをさらに広げてほしい」と呼びかけた。



上野幹夫氏

日本アセアンセンターの久保田有香 事務総長補佐は、今年は日ASEAN友好協力50周年の節目、「貿易」「投資」「観光」「人の交流」という同センターの活動の4本柱をさらに強化したいと語った。新たな関係をつくるためには若い世代による交流が特に重要だと述べ、発表者たちの活躍に期待を寄せた。



久保田有香氏

続いて9人の発表者が次々と登壇。将来の夢や目標に向かって奮闘する思いなどを日本語でスピーチした。

講評に立った桜美林大学・馬越恵美子名誉教授は、「優しさが伝わってくる」「難しい話題なのに分かりやすい」「理路整然としている」など、発表者一人ひとりの健闘をたたえた。



馬越恵美子氏

最後に日本アセアンセンター・日外協それぞれの活動主旨に合ったスピーチを表彰する特別賞が発表され、「日本アセアンセンター事務総長賞」にはシンガポールのタン・ウェイケットさんの「都会から地方へ」、「日外協会長賞」にはインドネシアのチャハヤ・ファティハー・デディ・プトリさんの「インドネシアのやさしい教育」が選ばれた。



〈日本アセアンセンター事務総長賞〉
タン・ウェイケットさん



〈日外協会長賞〉チャハヤ・ファティハー・デディ・プトリさん



発表会には ASEAN 各国の大使館関係者も駆けつけ自国の代表者を激励